

古寺 (田舎源氏露東雲)

へ秋の夜の 隈なく照す 月影も 雲のさはりのほの暗く そよぐ
尾花や 草の葉の 露重げなる 道もせを 分け行くころ 細流
れ

へ憂きを助くるお地藏様 お召しなされしそのお笠を 暫くお
貸し下さりませ

へオ、よい所へ心が付きしぞ

へ衆生済度の御仏に へ結ぶ縁もあれかすと 願ふてしのご菅笠や
へすげなく雨は降りしきり 濡るゝ袂の 四ツの袖 へかはして纏
ふ綾竹の みすの一重に籠るらん へ濡れてあま飛ぶ雁金の 翼交は
して 離れじと 頼る野寺の庭うちへ 暫したゝずむ二人連れ

へそちが申せし野中の寺とはこれなるか 余が訪ふて見ん頼ま
う頼まう

へ訪ふ声に真念は 相手ほしやと 立ち出でて

へそこへ来たのは誰ぢや誰ぢや

へ某ことは宿願あつて 今熊野へ参詣の帰るさ 行暮れて雨に
逢ひ 足弱の妹を連れ 甚だ難渋仕る一夜の宿り御無心申
す

へオそれは嘸ぞかしお困りぢやろう ホ、オ見れば二人共裸足
の様子 その墓手桶に水があれば 足を洗ふて上らつしゃれ
へ然らば言葉に従ふて

へどれおすゝぎを取りませう

へ深き契りを汲みて知る 草の井筒に釣瓶縄 おろすかひなの手弱
くも 柄杓のえにし嬉しやと 洗ふて清き恋ごころ

へさてお客人見らるゝ通りのこの荒寺 秋になつても藪蚊が多く
いぶしが無うてはイヤモ片時も居られませぬぢや そこで愚僧
は一走り檀家へ行き 枯木を貰ふて来まする間 暫く留守
を頼みますぞや ハテナ兄妹ぢや〜と云ふては居れど 確
かに二人は女夫連れ

へえ、

へイヤなに見劣りのないア、よい兄妹ぢやなア

へ小首かたむけ そり節 へ仇人は狐狸かしら化けの あんな兄妹
唐にもあるか 人もあろうにこの名僧を はめて去なしてしつぽりと
若しやきやつなら 眉につば エ、畜生めと 枯柴の いぶし求めに急
ぎ行く へなまいだなまいだなまいだなまいだ

へ誰が唱ふるかあの唱名 気味が悪うござりまするな

へさりとはは気の弱い 何も恐るゝ事はないぞや

へいたはり給ふおん情 へ露の宿りに濡れし身はほんに女子の冥加とも 思ふ心をうらうへに あの母さまの胴慾な 空恐ろしいたくみ事 姿ばかりか心迄 賤しき者と御見限り 受けし此身は 何とせん 悲しいわいなと泣き沈む へ折からあなたに怪しの音

へアレー

へア、コレありや鼠が位牌を落したのぢや ヤ、こりや氣を失ひしか 心を確かに持てコレ黄昏 ア、折の悪い 何ぞ吞ましてやりたいものぢやな

へとやせんかたへを見返れば 位牌に供へし茶湯の仏器 介抱なして 引起し

へコレ黄昏心が付きしか 光氏ぢや もうよい／＼ 早九ツに

間もなきに あの伴僧は如何せしか 帰りの遅い事ぢやなア

へ案じる折から吹き送る 夜風と共に鳴動し へ三ツの車に法の道 火宅の門をや出でぬらん へ仏の教へひきかへて へ人の怨みの深くして 瞋恚のほむらに身をこがし へ枕に立つる 破れぐるま へ打乗せかくれ 行かうよ へのうあさましの我姿 身は朝がほの日影まつ浮世はうしの小車の 巡る報ひを思ひしれと打つてかゝれば へとくよりも うかがふ修験の仮出立ち へ馳け入り中を押しへだて

へハハ、君にはこれに渡らせ給ふか 如何にも怪しき鬼女が振

舞ひ いで／＼ 障碍をはらひ申さん

へいで／＼ 加持を なすべきと珠数押しもんで立向ふ へ鬼女は怒りの形相にて 懐剣ひらりと抜きかざせば へ女は有合ふ菅笠おつ取り へさゝえ止むるあらそひも へ今ぞ心の角折れて 悪鬼の姿ぞ失せにけり。